

## Weisgerberの概念das Worten der Weltについて

その他のタイトル	Über Weisgerbers Begriff des Wartens der Welt (Kurze Zusammenfassung)
著者	木村 鈴子
雑誌名	独逸文学
巻	15
ページ	65-74
発行年	1970-02-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017895">http://hdl.handle.net/10112/00017895</a>

# Weisgerber の概念、das Worten der Welt について

木 村 鈴 子

「なにびとも己れの知っていること以外は、耳に入らない」“Niemand hört, als was er weiß” この Goethe の言葉は、特に現今の多様な言語研究の動向について、最もよくあてはまる言葉のように思われる。言語研究のこれら様々の傾向は、総括して言語内容研究と構造主義的研究との二大集団に分けられるが、両者は対立、あるいは反目の一時期を経て、現在ではそれらに相補的傾向、または総合への努力が認められるようである。これについては本年六月、純構造主義的考察の限界を論じた Bernhard Sowinski (*Möglichkeiten und Grenzen strukturalischer Sprachbetrachtung in der Schule* 1969) は以下のように述べている。「現在では、構造主義者も言語記号の内容的方面を取り入れようと努め、他方、内容中心の観点に立つ言語の考察は、言語の記号と形式の構造的性を従来よりも強く顧慮しながら、両見地が愈々ますます接近しているかの観がある」

“Heute scheinen sich die Standpunkte immer mehr anzunähern, indem die Strukturalisten nun auch die Inhaltseite der Sprachzeichen in ihre Untersuchungen einzubeziehen suchen, während die inhaltorientierte Sprachbetrachtung die Strukturiertheit sprachlicher Zeichen und Formen stärker berücksichtigt” S. 169. (なお、これら両傾向の対立から総合への意向については、関西大学文学論集第十八巻第三号、昭和四十四年一月、Leo Weisgerber 一特にその言語観、言語理論とそれに対する批判について、福本喜之助一の最後の項を参照されたい)

現在のドイツで隆盛を極めている言語内容研究 (Sprachinhaltsforschung) は、主として Weisgerber の内容に関する言語の研究 (inhaltbezogene Sprachforschung) から進展したものであることはいうまでもないが、このいわゆる言語内容学派の根本理論が、未だ十分に理解されていない憾みがある。特にその中心人物である Leo Weisgerber の画期的研究に関しては、多くは静態としての言語の研究、すなわち inhaltbezogene Grammatik の段階にとどまっているように思われるので Weisgerber の本来のものである動的言語研究の中心的概念の解明に努めたいと思うものであるが、今回はその中心概念の一つ、言語による世界の解明に必須のものとしての、das Worten der Welt の概念について、できうる限り簡明にその解明を試みたい。

周知のように、言語を作用する力 (die wirkende Kraft) と解した Weisgerber は、その言語の考察にあたって、四つの方向、すなわち、形態 (Gestalt)、内容 (Inhalt)、機能 (Leistung)、作用 (Wirkung) の各方面から眺めるべき必要を強調し、これをもって言語の全体的考察と名付けたのである。

(Ganzheitliche Sprachbetrachtung) このうち前二者を、静的考察 (die statische Betrachtung) 後の二つを一括して動的考察とよんでいる。(die dynamische Sprachbetrachtung) (これについては特に Weisgerber: Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen. Düsseldorf: Schwann 1963. Grundformen sprachlicher Weltgestaltung. Köln/Opladen: Westdeutschen Verlag 1963. Vier Stufen in der Erforschung der deutschen Sprache. Wirkendes Wort Deutsche Sprache in Forschung und Lehre 19 Jahrgang 1969 Heft 3 参照)

ここで直ちに本論に入るが、これから取扱う問題は“der sprachliche Zugriff” (人間が世界を解明しようと試みて進出し、把握しようと努める

こと、を意味するものでアメリカで用いられる“**approach**”とはいささか趣きを異にしている。換言すれば現実接近しようと迫ることである）と共に言語の機能を考察するに際して、その主要概念として、前者と最も密接な関連を有するものである。ここで取扱う **das Worten der Welt** は、人間の精神が現実の世界を解明し、それを表現しようとする際に、精神の働きによって、言語による表現に適合するように改変しなければならないという事実に立脚するものである。このことはとりも直さず、言語というものが、自らに内在する固有の力によって、外的世界を人間精神の所有物に変えるための、いわば道程である。これは改めて述べるまでもなく、**Humboldt** の深遠な言語観の中心的概念に由来するものとされている。(W. v. Humboldt: *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*: 1836)

**Weisgerber** に依れば、このように現実の世界を、人間の言語に適するように改変する精神の働き自体が **sprachlicher Zugriff** または **Sprachzugriff** である。これを表現すること自体が **das Worten der Welt** と称ばれるものである。これらの精神的活動によって造られた精神の世界が **Weisgerber** のいわゆる精神的な中間の世界 (**die geistige Zwischenwelt**) と称ばれるのであるが、ここでは総合的に密接な関連性のある諸概念の中から、先ず **Worten** の問題に限定して考察してみよう。

**Worten** という語の概念は、これまでも度々提起されているが、(**die sprachliche Erschließung der Welt** 1954) この語の根拠が、名詞的派生 (**Denomination**) の系列にあることは勿論である。今、この新造語の必要性を認め、この新語を選んだ理由を明確にすることは決して無駄なことではないと思われるのである。

**Weisgerber** の目指すところは、作用する力 (**die wirkende Kraft**)

として見た言語思想の展開であって、それに対する道を拓くことであった。既に大学教授資格認定の論文で、一現実性 (eine Wirklichkeit) としての言語の存在形式に関して構想した思想からの必然の帰結として、この Worten の問題や概念が提起されたのである。したがって差し当たり、この現実 (die Wirklichkeit) と世界 (die Welt) の概念を厳密、且つ適確に定義することが問題となるだろうが、(この両者の関連については、特に das Menschheitsgesetz der Sprache. 1964 参照) 特定の社会集団の中で、言語という一文化財 (ein Kulturgut) がどのようにして作用しているものか、また社会の認識形式としての言語 (関西大学「文学論集」第17巻第5号昭和43年3月、レオ・ヴァイスゲルバー、社会の認識形式としての言語、福本喜之助訳参照) という思想の中で、一言語団体がその国語の中に、世界に対して精神的に接近しうる道を有していること。そしてまた現実の世界へ迫る道であるところの言語の特質を明らかにすることが何よりも重要であることが認識されたのであった。(これについては Weisgerber の古典的名著 Muttersprache und Geistesbildung 1. Aufl. 1929. 2. Aufl. 1939. 3. Aufl. 1941 を参照) これは、先ず Humboldt に始る内的言語形式 (die innere Sprachform) の概念によって試みられたのであるが、その際、方法論的な中心点となったのは、言語の中間的世界 (die sprachliche Zwischenwelt) であった。この世界は、人間と本来の世界との中間にあって、その都度特定の言語団体に結びついた精神的な現実性ともいうべきものであって、その概念構成はそれぞれの言語の世界像 (das Weltbild einer Sprache) の考察という題目で取扱われている。ここで特に銘記すべきは「言語というものは相互理解のための単なる交換手段ではなく、自らと外界の対象との間に人間の精神力の内的な働きを通じて、おこななければならない真の世界ともいうべきものであるが、もしも、実際にこの感じが我々人間の心に起るとすれば、我々の心は益々多くのも

のを言語の中に見出し、言語にこれを付与しようとする、正しい道歩んでいることになる”(関西大学文学論集、第18巻第3号 Leo Weisgerber——特に、その言語観、言語理論とそれに対する批判について——福本喜之助11頁引用) この Humboldt の言葉である。これは sprachliche Zwischenwelt の存立を認めて始めて、言語本来の研究が手がけられるということであって、人間と対象との間の精神的な中間の世界が、どのようにして人間の言語能力によって捉えられるかを探求しなければならないことを意味しているものである。ではこの問題の核心にどのようにして近づくか、ここでもまた再び Humboldt の言葉 “言語はそれに内在する力をもって、この現実の世界を、人間精神の所有物へと改変するための道である”

……daß jede Sprache ein Weg ist, um mit der ihr einwohnenden Kraft die Lebenswirklichkeit in das Eigentum des Geistes umzuschaffen. は、我々を明確な思想的結論へと導いてくれるものである。

言語を現実には作用する力として捉える、いわゆる動的言語観によれば、元来、言語能力というもの、人間の精神的な生活を形成するために、人間が自由にしうる力であるという事実から出発したものである。したがって言語的なものの一切、あらゆる現象形式は、本質からみて人間の言語能力の作用様式として考察されねばならぬものである。言語能力の証左は、言語を用いて世界に接近する道を開拓するものであり、しかもこの接近の道は、依然として必然的に、人間の感性的、心的、精神的 (sinnlich-seelisch-geistig) なもろもろの力に適合しているものであって、換言すれば全く人間的 (menschlich) なものであるということが出来る。この点からみれば “言語は客観に近づこうとする人間である” という、あの Humboldt の不可解な言葉も始めて理解されるのである。したがって實在 (das Sein) というものは、同化 (Anverwandlung) のプロセスに於てのみ、人間にとって意識されるものとなるわけである。いわば、人間に賦

与された言語能力は、現実の世界を、言語的に同化させる人間の能力にほかならないからである。

ところで、上に述べたような可能性は、歴史的に考察して、人間の内部で実現され、とりわけ個々の言語団体、すなわち国語の内部で実現される。如何なる時代でも、人類というものは、それぞれの言語団体に分れているのであって、言語団体が所有する言語、すなわち各国語によって、自らを実現させるのである。それは各々の言語団体が、人間の言語能力を同時に展開させる条件を具えているがためであって、これこそ一國語の現実性 (die Wirklichkeit einer Muttersprache) といわれるものである。表現上、個々の言語として規定されているが、それぞれの言語団体と密接な関係にあって、相互に作用する国語というものは、根本的には、言語団体を通じて、言語によって世界を同化し、それを表現するものである。言語を考察する場合に、特に重要なことは、国語というものによって、世界を言語的に同化する形式を発見することであるが、このためにはどうすればよいのであろうか。

Humboldt は1920年以來、諸論文の中で、内的言語形式 (die innere Sprachform) の概念を取扱って、始めて言語学にこの概念を導入し、この種の問題に示唆を与えたのであったが、言語内容の世界の総体に関するこの根本思想は、爾來、Humboldt を超えて展開されることは殆んどなく、種々様々な見解によって現代まで遺憾ながら正しく理解されないままになっていた。(これについては、ドイツ文化年報、第3集、昭和18年7月、内的言語形式の問題とその意義一副題 Humboldt から Weisgerber まで、福本喜之助参照)

Humboldt のいう *Energieia* としての言語は、動的概念としての内的言語形式や、あるいは言語の世界像とも、ほとんど等しいものであって、この *Energieia* は、現実の意味で解すべきものであって、今日の *Energie*

すなわち (Kraft) の意味ではなく、ある可能性あるものが、自らを実現することを指しているのである。国語の現実、言語団体の生活の中へ、歴史的な行動や文化的な機能を果しながら、自らを実現させるのである。これまでも述べたように、Sein というものを、人間的に同化させるという意味で、言語は先ず *Energieia* であることが、何よりも重要である。こういった認識を規定しようとするれば、言語の中間世界 (*die sprachliche Zwischenwelt*) の構成に関する問題、すなわち言語の世界像の特質に関する問題へと立ち返らなければならないだろう。しかしながら方法論的にみて、静的言語考察と動的言語考察との間の明確な差異、人間集団の所産としての言語と言語団体の中での人間の言語能力の作用形式としての国語との間にやはり判然とした区別が存するのであって、これを認識して始めて国語は、言語団体にとって、世界を言語を用いて同化し、解明するプロセスとして眺められるのである。われわれは言語団体を通じて、世界を同化させる基本的なプロセスを明確にしなければならぬのであって、これに対して始めて *worten* という概念が、何よりも適切であると考えられるのである。Weisgerber は極めて簡潔に、一言語、すなわち国語というものを、一言語団体による世界解明のプロセス “*der Prozeß des Wortens der Welt durch eine Sprachgemeinschaft*” と定義している。

言語を用いて世界を人間に同化させるという意味で *worten* の概念を用いることの中に、主として客体によって条件づけられた解明 (*Erschließen*) と、特に主体によって遂行される改造 (*Umschaffen*) の主要な二つの観点が同じように含まれているのである。それではこの新語が、言語団体を通じて世界を言語的に同化するというこれまで余りにも一般に知られない言語思想を明かにするのに適しているかどうか、またその課題を十分に果し得るかということがとり上げられねばならない。この *worten* という表現形式は、古代高地ドイツ語や中世高地ドイツ語で用いられた動詞



worten (sich äußern) から来たもので、特に中世の神秘主義では、この種の表現が多く見られるようである。(geworten, verworten, wortigen, gewortigen, ungewortet, unwortlich 等)

(niht) geworten mugen ((nicht) ausreichend in Worte fassen Können) を強調したものからきたのである。この場合 *worten* という語を単に外面的な *Sprechen* や *Verlautbaren* と解すべきではなくて、神秘主義者がみた *Wort* に関するもっと内面的に深い見解が認められるのであって、神秘主義者にとってこの *Wort* を語ることは、原始キリスト教の *Logos* の伝統に関連して、常に意義深いものであったと思われるのである。なお中世の場合にも、上に述べたような *innere forme* と *worten* や *geworten* との密接な関連が認められるようである。ここで *Weisgerber* は *Meister Eckhart* と *Humboldt* を比較して、その同一の基本的関係を見出している。*Meister Eckhart* の場合には、*innere forme* を正しく *worten* すること、すなわち魂の内部から働きかける形成力という能力を与えられているのは個人であるが、これに対して *Humboldt* の場合には、内的言語形式が言語団体によって世界を同化する原則として働くのは社会集団の面であった。その結論として *worten der Welt* は、思想による世界の言語的改造の認識を持続的に、しかも明確に確保しようということである。したがって我々は、*worten der Welt* というものの中に当然全人類の言語的課題を認めることができるのである。

以上の概念の解明には、主として *Weisgerber* が彼の恩師 *Ferdinand Sommer* の八十才生誕祝賀記念論文集言語学文選 *Corolla linguistica*, 1955 に載せた論文 *Der Begriff des Wortens* によって、できるだけ簡潔に述べたのであるが、これに関連のある *der Sprachzugriff* の問題も、機会が許されれば改めて取扱ってみたいと思う。

## 参 考 文 献

- Weisgerber: Das Wort in der Welt als sprachliche Aufgabe der Menschheit, Sprachforum Jahrgang 1/1955
- Weisgerber: Der Begriff des Wortens Corolla linguistica, Festschrift F.Sommer zum 80. Geburtstag Wiesbaden; Havasowetz, 1955
- Weisgerber: Die vier Schauplätze des Wortens der Welt, Erkenntnis u. Verantwortung, Festschrift für Theodor Lilt, Düsseldorf; Schwann 1960
- Weisgerber: Sprache und geistige Gestaltung der Welt Bericht über den 4. Deutschen Pädagogischen Hochschultag vom 7. bis 10 Oktober 1959 in Tübingen (Zeitschrift für Pädagogik, 2. Beiheft, 1960)
- Weisgerber: Die sprachliche Gestaltung der Welt 3. neu bearbeitete Aufl. Düsseldorf; Schwann 1962 (von den Kräften der deutschen Spr. Bd 2)
- Weisgerber: Die vier Stufen in der Erforschung der Sprache, Düsseldorf; Schwann 1963
- Weisgerber: Grundformen sprachlicher Weltgestaltung Köln/Opladen; Westdeutscher Verlag 1963
- Weisgerber: Sprachpflege und leistungbezogene Sprachbetrachtung. Muttersprache, Jg, 73, 1963.
- 福本喜之助: Leo Weisgerber —特にその言語観、言語理論とそれに対する批判について— Weisgerber 教授生誕70年を記念して。関西大学文学論集 第18巻 3号 昭和44年1月
- 福本喜之助訳: レオ・ヴァイスゲルバー社会の認識形式としての言語。関西大学文学論集 第17巻 5号 昭和43年3月
- 福本喜之助訳: レオ・ヴァイスゲルバー「言語能力は人間であることの特徴であるか」関西大学文学論集 第16巻 3号 昭和42年1月

## Über Weisgerbers Begriff des Wortens der Welt.

(Kurze Zusammenfassung)

Suzuko Kimura

Nach Weisgerber, der die Sprache als eine wirkende Kraft

betrachtet, sind in der Erforschung der Sprache vier Stufen (Gestalt, Inhalt, Leistung Wirkung) auseinanderzuhalten. Während davon die ersten zwei eine statische Betrachtung sind, haben die beiden anderen einen energetischen Grundcharakter. Da die Sprache ihrem Wesen nach *Energeia*, gestaltende Geisteskraft ist, so müssen die Feststellungen der inhaltbezogenen Forschung in den "Prozeß der Aktivität der Sprachgemeinschaft" m.a.W. in die leistungbezogene Betrachtung umgedacht werden. So betrachtet, ist ein Wort in der Sprache ein "Zugriff auf das Seiende." Also "ein Sprachinhalt ist ein Akt der Vermenschlichung der Wirklichkeit."

Der Hauptbegriff in der leistungbezogenen Sprachforschung ist der Begriff des sprachlichen Zugriffs, und der Kern des Zugriffs ist der Akt des Wortens. Beide Grundbegriffe dienen zum Aufdecken der sprachlichen Gestaltung der Welt. In diesem Aufsatz kommt es mir darauf an, im Anschluß an Weisgerbers Schrift "Begriff des Wortens" 1955 denselben Kernbegriff kurz und bündig klarzustellen. Über die große Rolle, die die beiden Hauptbegriffe in der leistungbezogenen Forschung spielen, schreibt Weisgerber selbst in der neuerschienenen Abhandlung "Vier Stufen in der Erforschung der deutschen Sprache" Juni 1969 wie folgend :

"Wir haben für die deutsche Sprache diese Aufgabe aufgenommen unter dem Titel der leistungbezogene Sprachbetrachtung mit ihren Grundbegriffen des sprachlichen Zugriffs und des Wortens der Welt, (wobei die Neubildung, worten eindringlich den Kernvorgang des Überführens von Wirklichkeit in menschliche Sprachwelt, das, zu Wort (zu Sprache) gestalten, hervorheben will)."